

経済的發展と信用貨幣

岡橋, 保

<https://doi.org/10.15017/4355395>

出版情報：経済學研究. 13 (2), pp.1-26, 1947-12-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



經濟的發展と信用貨幣

岡 橋 保

内容目示

- 一 まへおき
- 二 生産手段在荷の轉用と信用
- 三 現實的蓄積と貨幣の蓄積
- 四 發展の經濟と追加貨幣
- 五 むすび

一 まへおき

銀行が信用を創造し得るかいなかの問題は、あるいは貨幣のヴェール觀を肯定する理論とこれを否定する理論との對立として、あるいはまた貨幣の中立性をめぐる議論として展開されて行つた。貨幣は經濟社會の外面をおほふところの單なるヴェールなりとみんとする見解に對して、そうではなく、むしろ貨幣は積極的に經濟社會にはたらきかけ、種々の攪亂と影響をもたらしものであるといふことが主張された。貨幣ヴェール觀の否定は、また、貨幣の中立性の否定、それの

弾力性の主張となつて現はれたのであるが、かゝる見解は、貨幣を交換手段あるひは購買手段と見做し、幣貨の増減は購買力したがつて需要の變動と同一視する立場に依據せるものである。このことはなによりも、いはゆる貨幣の「非中性」なるものが、貨幣の量的變化の非中性性として説かれてゐることからして、明瞭に推論しえられるところであつて、貨幣そのものゝ非中立性ではないことなのである。例へばハイエツク（註一）に従へば貨幣の數量の變化はかゝる需給の均衡を破壊し、商品の相對價格の變化とその生産の方向と數量とを決定するものであつて、貨幣の非中立性はかゝる事態のうちに看取され（註二）そうして貨幣數量の不變に保たれる經濟においては、實物經濟におけると同様に、ななら均衡の破壊は生じ得ないとされてゐるのである（註三）。

註一 高田博士「新利子論研究」二三八—九頁參照。

註二 Vgl. F. A. Hayek, Preise u. Produktion, 1931, SS. 26—8, 30〔豊崎氏邦譯六〇—二頁および六四—五頁參照〕。

註三 Vgl. F. A. Hayek, a. a. O., SS. 50—2, [邦譯七一—三頁參照]。拙稿「預金貨幣論」（本誌第十卷第二號）一三頁および鬼頭氏「貨幣と利子との動態」六二—五、四三七—八頁參照。

ところで貨幣の増減が銀行の貸出の伸縮によつて生ずるかぎり、貨幣の非ヴェール觀、したがつてその非中立性の理論はまた銀行の信用創造の能力を肯定する理論と相通するものである。これら一聯の見解は、いづれもその根柢に交換手段學說的貨幣本質觀をもつものであつて、貨幣のその他の側面をまつたく無視し、流通と生産との聯關性を洞察し得ざる貨幣本質觀の視角の限局性を、その共通の特色としてゐる。

もちろんハイエックにあつては、貨幣は生産と結びつけられ、貨幣數量の變化が如何にその時々々の生産構造を規定し、これを變革するかを説いてゐる（註四）。併し貨幣の謂はゆる「非中立性」は、彼がその視野を生産構造の一时的な變動、その推移の過程に限局してゐるかぎり、そこに看取し得るものであつて、經濟の全體にわたり、生産全構造に視野をひろげてその變化の落付く先まで見きわめるとき、そこには從來の均衡狀態を、しかしたゞ以前より多き物價水準における均衡の狀態を見出すにすぎないであらう（註五）。たゞ生産信用の授與が連續的に行はれるとき、かゝる推移が不斷に行はれて、變化せる物價水準における均衡狀態の實現がはゞまれるとはいへ、このことはなにかこの均衡狀態の否定、したがつて貨幣の非中立性の肯定とはならないのである。

註四 鬼頭氏 前掲書 四三七頁參照。

註五 Vgl. F. A. Hayek, a. a. O., SS. 53ff. [邦譯九五—九頁參照]。前掲拙稿一七頁參照。

このことは、貨幣ヴェール觀をとり貨幣の中立性を肯定せるものとされてゐる貨幣數量説と貨幣の非中立性の理論との間に、なにか本質的たる差異のなきことを物語つてゐるものなのである。たゞ事態の過程を見るかその一段階を見るかの差があるだけであつてともに同じ立場に立てるものと云はねばならない。このことを裏付けるものとして、われわれは、自由節約における需要構造の變化の過程における商品の相對價格の一时的な騰落を認めながらも、商品總量と貨幣總量との不變なることからして、實際における需要と供給との均衡を説くハイエックの理論構造を、指摘することが出来る（註六）。

註K Vgl. F. A. Hayek, a. a. O., SS. 50—2, 72 [邦譯九一一三頁以下一二〇頁參照]。拙稿「預金貨幣論」一二頁參照。

Vgl. F. A. Hayek, Geldtheorie u. Konjunkturtheorie, 1929, SS. 46—7, [野口氏邦譯書五五—六頁參照]。

すなはちハイエックが問題にしたのは、單なる相對價格の變動ではなくして、貨幣の數量の變化による相對價格の變動にあつた。詳言すれば、貨幣がその價值の低落したがつて一般物價水準の上昇の過程において個々の商品價格に影響をおよびし、生産の數量と方向とを決定する點をば強調して、貨幣の個別的價值の低下、商品の相對價格の變化が、貨幣の一般的價值の低落、したがつて一般物價水準の騰貴への過渡的な中間的な現象であることをば見透さうとはしなかつたといふだけである(註七)。それは、生産信用による商品の相對價格の騰貴、生産構造の變化は、やがて生産方法の低度化、生産過程の短期化を必然に惹起するにいたり、そこに恐慌の原因をみることに重點がおかれてゐたがためである。このことは、貨幣數量説の根本的な立場において、經濟恐慌を見んとすることであつて、彼の見解が、その理論的根柢において貨幣數量説と異なつてゐることをなから證明するものではない。たゞ貨幣數量説のごとく、商品の相對價格の無變化の状態、貨幣の一般的價值の變化、物價水準の騰落に問題があるのではなくして、經濟循環の擾亂の要因を、その過程における商品の相對價格の騰落のうちに求めんとしたにすぎないのである。貨幣のヴェール觀と非ヴェール觀との相違は、たゞかゝる中心點の差異を明らかにし、強調する點にあるにすぎない。従つて「貨幣の諸價格ならびに生産への影響が、一般物價水準の變化の起否とはまつたく無關係に存在する多くの場合が考へられる」とはいへ、彼にとつては一般物價水準の變化を結果せざるがごとき相對價格の變化は問題にはならなかつたわけである(註八)。換言すれば商品の相對價格

の騰落、したがつて貨幣の個別的價格の變化を問題にし、これを強調しながらも、その主張の根柢には、實際における一般物價水準の騰落、貨幣の一般的價值の變化が含意されてゐる。

註 7 Vgl. F. A. Hayek, *Preise*, SS. 5—8. [17—18 頁および 30 頁參照]。前掲拙稿四一頁參照。

註 8 Vgl. a. a. O., SS. 26—7. [17—18 頁參照]。前掲拙稿四一—二頁參照。

かくして生産構造の逆轉的な變化が物價水準の騰貴に伴はれるものなるかぎり、貨幣の能動性、非中立性は、單に生産構造の變化といふことにあるのではなくして、物價水準の變化のうちに見出され得るにすぎず、しかもこのことは貨幣をたゞ交換手段として見るかぎりにおいてのみ、言ひうることである。故に謂はゆる貨幣のヴェール觀と非ヴェール觀もともに同じ立場に立てるものであつて、貨幣の一般物價水準への能動的影響を肯定する點においてなにかわるところはない。従つて貨幣をヴェールと見るかいはなは、商品の相對價格に對する貨幣の影響を認めるかいはなにあるのではなくして、むしろ一般物價水準への影響を肯定するかいはなかの點を求められねばならないのである。

しかしながら、一般物價水準の變化は、價值の尺度としての貨幣自體の價值の變化によつてのみ言いうるところであつて、交換手段としての貨幣にはなほ經濟均衡破壊の力はもとより、物價水準變動の能力もなきものと言はねばならない。そこには貨幣自體の價值の變動に伴ふ價格名のつけかへ、價格水準の對應的な計算がへがあるのみなのである。かゝる貨幣の一般物價水準への能動的影響を是認せざる立場こそヴェール觀ともいはるべきであつて、貨幣は元來經濟循環に對して中立的なものとされてゐる。われわれはこゝにかゝる貨幣の中立性、従つて、信用貨幣の生成が純需要の創造、追

加貨幣の創造にあらざる事をば、經濟的發展における信用貨幣の役割を吟味することによつて明らかにせんとするものである。

二 生産手段の轉用と信用

商品經濟の社會は利潤を基軸として旋回してゐる。生産はすべて利潤の獲得を目的としておこなはれ、利潤の多少は、生産のあるひは擴張せしめ、またあるひはこれが縮少を齎らすにいたる。これら生産の擴張または縮少を媒介するものがすなはち資本の移動であつて、各企業間ないしは各種生産部門間相互における資本の移動は、それぞれの分野における投資の増加あるひは減少、從つてそれぞれの生産の伸縮となつて現はれるのである。發展的な經濟社會にあつては、個々の生産企業家によつて企圖される生産の擴張、その新設は、したがつてそれらの投資の總結果は、生産資本の全體としての増加となつて現はれ、やがて社會的生産物の總量の増加をもたらしにいたる。謂はゆる新資本の形成、あるひは資本の蓄積とは、すなはちこのことを意味する。發展なき經濟にあつては生産手段の生産と消費資料の生産との間の關係が一義的に規定されており、その間に少しの間隙も存しない。年々歳々同一量の生産物が生産され、消費されて、なにも變るところがないのである。しかるに新たなる投資とは、これら生産手段と消費資料との構成の割合を變更するものであつて、基本的にはこれまで消費資料の生産にむけられてゐたところの生産手段の用途を、かへてこれを生産手段の生産に轉用することであり、またこれを同時に、他方、消費のために豫定せられてゐたところの消費資料を生産的消費に振りかへること

によつても行はれるのである。

經濟的發展はこのやうに主として生産手段の新結合と、一部消費資料の轉用によつて成就される。それは社會の總生産物の絶對量とは、さしあたり、少しも關係するところなきものである。それら所與の社會總生産物のうちからこれまでよりもヨリ大なる部分が投資されるといふだけであつて、従つて生産手段の諸種の要素の新たな組合せ、その機能的配置の轉換が行はれるに過ぎないのである。變化するものはその社會の生産物全體の價值量ではなくして、たゞそれらの内部の質的な振替、だけである。そうしてこの生産手段在荷の轉用こそが社會の經濟的發展の物質的な前提をなしてゐるのである。(註1)

註1 Vel J. Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 2. Aufl., 1926, S. 103. [中三・東畑氏邦譯書一七〇頁參照]。

貨幣經濟にあつては、しかしながら、かゝる生産手段在荷の轉用において見らるゝ現實的な蓄積に、貨幣の蓄積が先行しなければならぬ。そこでは社會の商品流通はすべて貨幣を媒介として實現され、前者の變化は貨幣流通の對應的な變化を伴はねばならないからである。しからばかゝる新たに追加せらるべき生産資本の媒介に必要とされるところの追加貨幣資本は、如何にして調達せられ、また何處から出てくるであらうか？ それはいふまでもなく、個人的には、自己金融によるか、他人よりの借入にまたねばならないのであるが、もしも前者によるものとして、その所要の資金がそのまゝ遊資の形において現金として手許にあるわけではなく、むしろ銀行制度のもとにあつては銀行預金として存在し、しかもそ

これは現實には銀行を通じて他に貸付られてゐるのである。また銀行よりの借入によるとしても、銀行にそれだけの遊資が必ずしも存在してゐるわけではない。銀行は預金の引出あるいは貸付などによるこれらの資金需要を充足せんがためには、結局、遊資の轉用か、主として信用の創造によるのほかにないのである。

いまシュムペーターに従へば、經濟的發展を特色づけるものとして、發展擔當者の變化—新企業の出現—とともに、とくに生産手段在荷の轉用、すなはちその組合せの質的な變化が、強調されてゐる（註二）。このことはなら異論のなきところではあるが、しかしながら問題は、彼がさらに、この經濟的發展が「追加」的生產信用、すなはち「購買力の創造」によつて賄はれることをも、その特質として擧げてゐる點なのである（註三）。しかしこゝにいふところの「購買力の創造」が、貸出銀行そのものにとつての「創造」すなはち新たな貸出資金の獲得を意味するものなのか、あるいは社會全體にとつて追加的な購買力の「創造」があつたと解すべきなのか、が問はれなければならない。蓋し、その如何によつては經濟社會におけるその影響するところがまったく異なるからである。こゝに發展的經濟における貨幣流通の問題が重要なものとなつてくるのである。

註二 Vgl. J. Schumpeter, a. a. O., Ss. 101, 103. [邦譯一六七—八頁および一七〇頁參照]。

註三 Vgl. J. Schumpeter, a. a. O., S. 153. [邦譯二五九—二六〇頁および一七二頁、二五七頁、二六三—四頁參照]。

言ふまでもなく經濟循環の過程にありては、「支出」は「收入」によつて賄はれ、企業家はその必要とするところの生産手段の獲得が保證せられており、確保されてゐる（註四）。しかるに發展の過程にありては、かゝる収入と支出とは原

則上一致せず、先行生産の収入をもつてしては、もはや従来通りの生産手段は獲得することが出来ない。詳言すれば、生産手段の轉用を實現し、成就すべき購買力は、循環の過程からは與へられないし、また發展の擔當者たるべき新企業家もその本質上、かゝる購買力の源泉たるべきところの財産價值を持つてゐるわけではない。たゞこのことを可能にするものは、一つに信用、すなはち購買力の「創造」をほかにしてはない。信用は従來の財貨數量に對して新たな購買力を造り出すから、所得は、最早、これまでに同じ數量の生産手段の媒介を保證しなくなる。こゝに謂はゆる「強制節約」(Gezwungenes od. erzwungene Sparen)なる現象が現はれるのである。この強制節約だけの生産手段が新企業家によつて、従來利用せられてゐたところの用途から抜きとられ、轉用されるのである。追加生産信用こそは財貨吸引の槓杆となり、新企業家をしてかゝる生産手段在荷の轉用を可能ならしめ、國民經濟を新らしき軌道に強制することを可能にするものである、といはれてゐる(註五)。

註四 Vgl. J. Schumpeter, a. a. O., SS. 103—4. [邦譯一七一頁參照]。

註五 Vgl. J. Schumpeter, a. a. O., SS. 152, 156. [邦譯二五七頁および二六三—四頁參照]。なほ中山博士「純粹經濟學」一九〇頁參照。もちろんかゝる生産手段の用途を變更するがために要する貨幣資本が、銀行の貸付にまたねばならないものとしても、このことが必ずしも直ちに、社會經濟的には追加購買力の創造、その發生と見なければならぬ理由があるであらうか？もとより生産手段の用途の變更は、その轉用すべき生産手段に對する需要の増大となり、したがつてその價格の騰貴に導くであらう。併しながらこの生産手段價格の騰貴が、いはゆる銀行の創造せる購買力によつてもたらされたものとはかぎ

らないであらう。生産手段需要の増大は、蓄積貨幣の轉用によつても招來されるからである。しかもかゝる生産手段價格の騰貴が、經濟的發展そのものにとつてなら本質的かつ必然的な前提條件をなすものでもない。むしろ生産手段の用途の變更、その機能的配置の轉換こそ、經濟的發展の根本的な條件をなすものであつて、これが轉用、その機能配置の轉換がその過程において生産手段の價格の騰貴を隨伴することがあらうとも、そのことは決して必然の條件をなすものとは言ふことが出来ない。

しかるにシユムペーターが、銀行の追加購買力の創造をもつて經濟的發展に必須の前提條件となす所以は、實に、彼の貨幣本質觀に由來するものである。すなはち、彼に従へば貨幣とは交換手段としての機能を營むものである。かゝる機能の擔當者は商品たるを單なる紙片たるを問ふところではない。交換の手段として機能するかぎりには、その素材の如何は問はず、すべてが貨幣なのであつて、かゝる機能を果さなくなるとき、それらはまた貨幣たることをやめねばならないのである。従つて貨幣の蓄藏たるものは存在し得ず、經濟的發展に發おける収入と支出との不均衡を經濟循環の過程から求めることが出来なかつた所以である。經濟循環における収入と支出との均衡、蓄藏貨幣の存在の否定は彼をしてより少なき収入分でもつて賄い得ないより多くの支出をば、専ら外からの移入購買力でもつて充足せんとせしむるにいたつた。即ち彼は、突然、銀行を出現せしめてこれに追加購買力を創造せしめたのである。従つて發展經濟にあつては特定商品の價格騰貴とともに、やがて一般物價水準の騰貴が必然的な現象として說かれてゐる所以である。

しかしながら資本もなく利潤もなく、また利子もなきところに、従つて貸付資本もなきところに如何にして銀行が存在

しうるかといふことは、いま、しばらくこれを措くとするも、經濟循環の過程をば、生産と消費とが年々歳々同一の規模において繰返されてゐる資本主義社會の靜止經濟と混同し、同一視してゐるの一點は、「これを看過することは許されない。すなはち換言すれば、發展的經濟の出發點であり、その對蹠的な經濟としてのかの靜止的な經濟と經濟循環の過程とはまったく異なる經濟形態である。従つて經濟循環の過程から直ちに經濟的發展の問題に移ることは不可能なことがらなのである。この經濟形態の相違を無視するとき、利潤も利子も従つてまた貸付資本もなきところに、突然、銀行を出現せしめ、これに追加貨幣の源泉を求めざるを得なくなるのであつて、こゝにシュムペーターの經濟的發展論における論理の飛躍の根源が見出だされる。

經濟循環の過程と靜止的資本主義經濟とは異なる。資本主義的靜止經濟にありては、すべて資本もしたがつて利潤も存在する。貨幣は資本として利潤を生むがゆゑに、貸借され、貸付資本となる。銀行とはかゝる貸付資本の媒介機關として發生したのである。さらに銀行は靜止經濟にあつても諸種の事情から發生する休息貨幣、蓄藏貨幣を機能資本たらしめる機能を營む。すなはち、詳言すれば、靜止經濟にありても固定資本は更新されねばならないし、それがためには、それは年々一部分づつ償却されねばならない。固定資本のこのやうな特殊性は、その耐久年限の如何に應じて、種々なる程度の償却基金の蓄藏を生ぜしむ。さらに産業資本の循環の過程において、流通の諸事情による貨幣資本の遊離、休息が生じ、これらの貨幣もまた蓄藏される。經濟の各所に發生するところのこれらの種々の蓄藏貨幣は、銀行に流入して銀行の貸付資本となつたのである。銀行はかゝる貸付資本の媒介機關として、休息貨幣資本を機能貨幣資本たらしめんがために、貨

幣資本の運用の實際の擔當者を轉換せしめるわけである。かくして新企業の出現に要する貨幣資本は、既存の貨幣資本であり、決して新たに銀行によつて追加形成されし貨幣資本ではないのである。

もちろん、このやうな貨幣資本の運用の現實的擔當者の轉換は、貨幣の充當面の變化をきたし、購買力の發動の分野の變化は特定商品價格の騰落となつて現はれるであらう。併しかゝる特定商品の相對價格の變化、諸商品相互の交換比率の變化は、商品の價格運動における一現象であつて、社會の需要構成の變化に順應せんとする生産構造の變化であり、それによつて資本の再分配がなされ、あらたなる均衡が形成されるのである。社會の生産構造をその變化せる需要構成に適合せしめ、商品の價值關係の變化を實現せんがために貨幣的需要の指向面が變はるのであつて、後者が變化するがために商品の價值關係が變化するのではない。従つて貨幣的需要の指向面の變化が追加購買力の創造によつて遂行さるゝことを必要としないのである。

とはいへ銀行の貸付資本が銀行自身にとつて追加的な新資本であることを、もちろん、さまたげるものではない。即ち詳言すれば銀行の貸付けるところのものは、單に現金、したがつて貨幣的貸付資本たるのみならず、また信用をも貸付ける。擬制的貸付資本なるものこれであつて、これこそは銀行そのものにとつてはまったく新たに創造されし資本である。銀行は、もはや、貨幣資本の貸手と借手との間を斡旋する單なる媒介者ではなくして、彼にとつてはまったくの新たな追加資本をもつて貸付にあたるわけである。併しながらこの場合にあつても社會經濟的には追加資本の新たな形成もなければ、創造なる事態も看取され得ない。われわれはかつて、信用貸付の具體的な場合についてこのことを詳論したのであ

るが、手形の割引にあつても、また手形貸付や當座貸越にあつてもたゞ資本形態の轉換があるのみであり、さらに諸種の無擔保貸付にありても新資本の創造は見られないのである（註六）。

註六 拙稿「預金貨幣論」二一頁以下参照。

さらにまた、社會經濟的に見て、その購買力總量の増大、追加資本の形成があつたとしても、一般的貨幣價值の低落、したがつて一般的物價水準の騰貴は生じない。蓋しこの場合にありても謂はゆる追加購買力の「創造」もなければ新資本の「創造」もないからである。あるものは資本の新たな「形成」だけであつて、謂はゆる「創造」ではない。従つて特定商品の價格は騰貴し、相對價格の變化、價值關係の變動、あるいは個別的貨幣價值の低落はあつても、一般的貨幣價值の低落すなはち一般物價水準の騰貴はない。こゝに社會の購買力總量が増加したのは、その需要構成の變化に伴ふ諸商品の相互の新たな價值關係の變化に順應し、適合せんがためであつて、單に購買力の増加による貨幣價值の低落、したがつて特定商品價格の上昇が現はれたのではないのである。ゆゑに特定商品價格の騰貴はあつても、一般的貨幣價值の低落の反面としての一般物價水準の騰貴は決して現はれない所以である。かゝる追加購買力の生成、新資本の形成は、商品相互の從來の價值關係を變化させ、新たな價值關係に適合せんとするものであつて、商品の價格運動を媒介し助成するものにすぎないのである。かゝる商品の價格運動に對する信用の作用、したがつてこの價格運動の過程における信用貨幣の生成が持つところの意味に關しては、なほ詳論するを要するも、これは他の機會にゆづることとする。たゞこゝには、信用貨幣の生成が商品の價格運動に對しては、決して追加購買力の「創造」を意味するのではなく、それは、たかたか新資本

の「形成」、新購買力の「生成」を意味するにすぎざることを強調しておきたい。

以上述べたるがとくに經濟的發展における生産手段在荷の機能的配置の轉換があるいは單に現在の貨幣的需要の指向面の變化によつて媒介されやうと、あるいは新たに追加形成されし貨幣的需要の増大によつて實現されやうとも、生産手段價格の騰貴を齎らす。經濟的發展はこのやうに商品の價格運動とともに現はれること多く、恰かも前者は常に後者を隨伴するものごとくに見える。しかれども兩者は明らかに區別さるべきことがらであり、經濟的發展の物質的基礎は生産手段在荷の機能的配置の轉換にあつて、生産手段價格の變化は單にこれに隨伴的な現象であり、それに本質的なものでもなければまた必然的な現象でもないのである。従つて經濟的發展の初端の段階にありては、もともと流通上の問題なるものは存在しないのである。

しかるにこゝに流通上の問題の存在する所以を説くシュムペーターの見解の背後には、獨逸の國民經濟の特殊事情の伏在してゐることが、看過されてはならない。産業革命の洗禮をうけることのおそかつた獨逸が先進資本主義諸國の間に伍して急速に資本主義化していつた過程において、銀行そのものの演じた役割は、實に大きかつた。もつとも早く産業革命を經過せるイギリスの國民經濟におけるがごとく蓄積資本を持つことの尠なかつた獨逸の國民經濟は、その産業の開發、育成には、銀行の積極的な援助に頼らざるを得なかつたのである。これ獨逸の信用銀行はイギリス流の商業銀行とはその趣を異にし、専ら龐大なる自己資本を擁せる投資銀行として出發せる所以である。そして獨逸の産業發展のうへに寄與せしところの大きかつた投資銀行の役割がシュムペーターの腦裏を強く支配したのであつて、彼の經濟發展の理論こそ

は、かゝる獨逸の國民經濟の發展の現實の過程を反映せるものであり、その理論的な再現にはかならないのである。すでに述べたるがごとく、利潤の存在が貸付資本の存在を可能にし、従つてこれが媒介機關たる銀行の發生を可能ならしめたのであるが、利潤を差額利潤としてのみ把握するシュムペーターにとつては事態はまさに逆であつて、銀行が貸付資本の存在を可能にし、かくしてまた利潤の發生が可能となるのである。従つて銀行信用の特質は「追加資本の創造」にこそ看取されねばならなかつたのである。

われわれは、さらに次節において經濟的發展の物質的基礎たる生産手段在荷の用途の轉換が、流通面的には、單に、貨幣機能の變化によつて媒介されるにすぎざることを、貨幣蓄積の具體的形態の考察によつて示さう。

三 現實的蓄積と貨幣資本の蓄積

これまで消費部にむけられてゐた商品在荷を生産部に轉用したり、あるいは生産手段在荷の用途を轉換するなど、これらの現實の蓄積にさきだち、もちろん、貨幣資本の蓄積がなければならぬであらう。さらに、その貨幣資本の蓄積も、ある程度の大いさに達してゐなければならぬ。これら一定の大いさに達した、蓄積貨幣が存在せざるかぎり、追加生産資本の媒介に要する追加貨幣資本は、シュムペーターの強調せるがごとく、銀行の奇蹟的な追加貨幣の「創造」に依存し、これを期待しなければならない。しかれども蓄積貨幣もなく利潤もなければ貸付資本もなきところに、銀行の「貨幣創造」が如何にして可能であらうか。シュムペーターは、既に述べたるがごとく、たゞ、銀行の「追加」資本

——それは銀行自體にとつても「追加」資本であるのみならず、社會經濟的にもまた「追加」資本である——の「創造」能力を獨斷するだけであつた。併し追加生産資本のためには、それに對してはなにらの社會的生産物も對應しない、いはゞ餘分な「追加」貨幣を、別段必要としないのである。といふのはこれら生産資本の追加分は、商品價值としては既存のものであつて、たゞ從來は消費資料として使用されてゐた商品が、その用途を變更して、生産手段となり、あるいは一つの生産部門から他の生産部門へと移され、その使途を轉換しただけである。すなはちそこではたゞ生産手段在荷の機能配置の轉換が行はれただけである。従つてかゝる商品價值分を實現すべき貨幣量も既存のもので充分であり、生産手段の轉用とともに、貨幣の轉用、すなはちその機能の變化が行はれば、それでことたりるのである。詳言すればかゝる追加生産資本を媒介するための追加貨幣資本は、生産物の販賣によつて得られたる利潤部分から供給される。産業企業家は、いまや、彼等の利潤の全部をそのまゝ從來と同様に、貨幣「所得」として支出するのではなくして、むしろその一部分を貨幣「資本」として流通場裡に投するにすぎないのである。

ところでこれら追加貨幣資本は、いふまでもなく、各企業家の手許で直ちに利用し得るやうな形において、常に、存在してゐるわけではない。幾多の産業部門における投資、およびこれらの投資をそれぞれ構成してゐる種々の個別的投資は、その稼働期間の長短に應じて大小さまざまの程度の貨幣蓄積を持つてゐる。かくて投資の各部分において、一方では一定の大いさに達した蓄積貨幣が絶えず生産資本に轉化してゐるところがあるとともに、他方ではなほ貨幣の蓄積を續けてゐる部分があるといふのが、現實の状態なのである。これら二つの部分は、交互に、購買者となり販賣者となつて相對立

する。このやうに、一方では生産の規模を擴大しつゝあるとき、他方では、貨幣の蓄積が行はれており、また他方では現實的蓄積の行はれてゐるとき一方では貨幣資本の蓄積が繼續されてゐるとしても、現實的蓄積の遂行者——擴大企業の擔當者——の顔ぶれが、それぞれ變つたといふだけであつて、社會全體としては現實の蓄積そのものが行はれてゐるといふことにはなにかはるところはなないのである。そうしてその流通の必要をみたす必要なる貨幣は、現存せる貨幣の數量だけで充分であるといふことは、明らかである。ただこゝでは貨幣の充用者の轉換、したがつてその用途の轉換にともなひ、貨幣の機能に變化が起るだけなのである。

貨幣のかゝる機能の轉換は、銀行を通じて實現される。すなはち、各産業企業家の手許において蓄積されつゝある貨幣は銀行に集積される。こゝで一定の大いさに達したこれらの集積貨幣は貸付資本に轉化されて他の産業企業に貸出され、現實的な蓄積の過程に入るのである。個々の貨幣所得も、また、もちろん直ちにそのまゝでは貨幣資本に轉化することは出来ない。それが貨幣資本となつて能動的に價值を生み出すやうにならなうがためには、ある程度の數量に達してゐることが必要である。このやうにまだ貨幣資本として機能することの出来るやうな状態に達してゐない少額の貨幣が集積されて、價值生産的な貨幣資本になる過程を媒介することも銀行の役割である。これらの蓄積貨幣は、個別的にはそれぞれすでに所得の貨幣形態たるの存在をやめて、資本の貨幣形態たらんとする過程にあるものであるが、他方、それが銀行を通じて社會經濟的には、すでに、貨幣資本として機能してゐるといふ事態なのである。

かくして經濟的發展は、その物質的、基礎的内容としての現實の蓄積を遂行し、實現し得るがためには、充分なる貨幣

資本の存在をその前提條件として持たねばならない。それは充分なる貨幣の存在をまちてこゝにはじめて可能となるものゝやうである。シュムペーターは發展的經濟を論ずるに當つて、これとは異なる經濟形態たる消費中心的な經濟から出發したということにもよるのであるが、かゝる蓄積貨幣の存在が經濟的發展に重要なことに眩惑されて、彼は遂に銀行の「創造」貨幣をもつてかゝる蓄積貨幣に替えんとしたのである。しかしながら、こゝにいふところは、決して充分なる蓄積貨幣がまづ成立してゐて、その後にはじめて經濟的發展が開始され得るといふことを意味するのではない。むしろ經濟的發展はそれの條件の發達とともに進むものであつて、みづから可能にする條件や基礎を創り出しながら發展してゆくのである。信用制度、銀行制度の成立は、經濟的發展の所産であるとともに、また經濟的發展を可能にし促進せしむるものである。そうして銀行の形成するところの貨幣は、謂はゆる餘分な「追加」貨幣ではなくして、それは實に經濟みづからによつてひそかに蓄積されしものゝ轉形にはかならないのである。銀行の形成する貨幣資本は、二重の意味において蓄積貨幣の轉形である。それは、第一には、その使用者を、從つてその機能を轉換されし貨幣であるとともに、第二には、蓄積貨幣の存在形態の轉換されしものである。換言すれば信用貨幣は他の資本形態の變化したものであるといふ意味にいてである。

その貨幣本質觀からして蓄藏貨幣の存在を否定せざるを得なかつたシュムペーターは、經濟的發展のための蓄積貨幣の存在をも否定し、これにかはるべきものとして銀行の創造貨幣をもつてしたのであつた。しかしながら蓄藏貨幣の存在せざることをもつて、直ちに貨幣の蓄積のなきことと同一視することは出來ない。もとより蓄藏貨幣は貨幣蓄積の一つの形

態ではあるが、決してその全部を意味するものではない。われわれは貨幣蓄積の現實的形態が、蓄藏貨幣以外にもあることを明らかにし、それらの現實的蓄藏形態の各々を考察することによつて、銀行の謂はゆる「創造」するところの信用貨幣がそれら蓄積貨幣の轉形であつて、決して餘分な「追加」貨幣にあらざることを解明しやう。

蓄積されし貨幣は、具體的には、もとより、必ずしも、貨幣といふ現實的な形態において蓄積されてゐるものではない。素朴な蓄藏貨幣のごとき現實的な蓄積貨幣は、銀行制度のもとにありては、もはや存在せず、それは、一部、銀行の支拂準備金ないしは手許現金として存在してゐるのみである。そして大部分の蓄積貨幣は、むしろ、銀行預金とか、あるいは、公社債および株式などの形において、名目的に蓄積されてゐるにすぎない。すなはち、第一の銀行預金なるものは、貨幣の請求權の蓄積であつて、その預金の一部分のみが手許現金準備として現實に蓄積されてゐるだけであり、その大部分は貸出されて銀行には存在しない。そこでは貨幣資本の名目的な蓄積があるにすぎないのである。第二の公社債や社債も單なる債務請求權であり、第三の株式も收益の請求權にはかならない。これはいづれも貨幣そのものの蓄積を意味せず、貨幣に對する單なる請求權の蓄積にはかならない。そしてこれらの貨幣請求權は、却つて現實の貨幣支出を必要とするものであつて、従つて一方における貨幣の蓄積が他方における現實の貨幣の支出となつてゐることを意味する。もちろん預金は、公社債ならびに株式などとは異なり、銀行における貸出あるいは公社債および株式などの買入といふ中間的な操作をもちて、はじめて、その貨幣蓄積が同時に現實の蓄積を可能たらしめるといふ差異はあるが、ともあれこれら三つの貨幣蓄積の現實的形態のもとにありては、貨幣蓄積そのものが同時に現實的蓄積を意味し、兩者がならび行はれ得るこ

とが可能となるのである。

このやうに貨幣は、上記の三つの形態において蓄積されることにより、その機能の轉換が成就されるのであるが、銀行におけるこれら三つの蓄積形態は必ずしもつねに現實の貨幣支出を伴はず、従つてそこでは貨幣機能の轉換が行はれないやうに見える。銀行における諸種の貸出について見るも、預け入れられた現金の貸出といふものはむしろ、その貸出全體のうちの極く一少部分を占むるにすぎず、その大部分は信用の貸付である。すなはち銀行の授信業務の中心は預金貨幣の創設と銀行券の發行とである。これら信用貨幣の發生は、既存の貨幣の機能の轉換ではなくして、むしろ既存の貨幣の傍に、別個に、貨幣が追加されたことを意味する。従つてその生成が、たゞに銀行にとつて貸付うべき資本の追加を意味するのみならず、社會經濟的にもまた資本の追加がなされたごとくである。

併しながらこの場合にありてもなほ、貨幣量の増加があつたといふよりは、むしろ貨幣の機能の轉換が行はれたにすぎないことを、われわれは強調するものである。そしてこれらの信用貨幣が、既存の貨幣の傍らに新らたに追加されたものであり、かつ社會資本の絶對的な増加となることは、もとより起り得ないわけではないが、その場合にあつても、それは「それ自身に對してのみに特別に創造されし支拂手段」からなる謂はゆる「追加」資本の創造を意味するものではない。蓋し國債や社債や株式などの形態をとれる資本がいまや信用貨幣資本となつただけで「新」資本の形成ではなくして、資本の形態變化が行はれただけである。このことは、すでに他の機會において有價證券擔保貸付の具體的内容を明らかにし、そこに生成するところの信用貨幣の社會經濟上における意味を明らかにすることによつて、詳論したところであるか

ら、こゝにはこれ以上立ち入ることをしない（拙稿「預金貨幣論」参照）。そうして受信者は、いまや、有價證券より信用貨幣へとその資本の形態を轉換することによつて、その蓄積貨幣をば機能貨幣資本へと機能の轉換を行ひ得るわけである。かくして銀行は現實の貨幣の機能轉換を媒介するのみならず、また自づからもそれを行ふのである。

かくして經濟的發展にとつて根本的な物質的な前提條件たるものは、生産手段の用途をかへることであり、その機能配置を轉換することであつて、それに伴ひ流通面においてはかゝる基本的條件を實現すべき貨幣の機能の轉換が必要となるだけである。流通貨幣の量的規定の問題は、いまだ、決して起り得ない、そうしてこの貨幣の機能の轉換が、現實において、謂はゆる銀行の「信用創造」の過程を経て遂行されるか、それとも預託現金の貸出によつてなされるかは、經濟的發展そのものにとつては、全くどうでもよきことからである。

四 發展の經濟と追加貨幣

經濟的發展の端初における投資の増大は、前述せるがごとく、専ら、生産手段の機能的配置の轉換、貨幣の機能の變化として現はれるのみで、生産手段在荷についても、また貨幣についても、その量的規定の問題はいまだ現はれなかつた。従つてそこでは貨幣流通のうへに特別な問題は生じなかつたわけである。しかるに經濟的發展の進行、新投資の増大は、やがて、その結果として、より多くの商品價值量を流通内に投することとなる。これら追加價值量は、また、同時に、その實現に必要な追加貨幣を要求する。貨幣流通は、こゝに、あらたなる問題を提供するにいたる。すなはち、いまや、

貨幣の質的規定の問題のほかに、あらたにその量的規定の問題が登場してくるのである。

發展的經濟における流通商品の價格總額の増大は、これが媒介貨幣の追加を要求するにいたるが、しからばかゝる流通に要する追加貨幣は何處から生じ、あるいは如何にして賄はれるか？ それは大體つぎの三つの源泉からまかなはれる。すなはち、

- (1) 金の追加生産
- (2) 蓄藏貨幣
- (3) 流通貨幣の節約と信用貨幣

これである。

商品生産は、従つて、商品流通は、それが條件の發展とともに自づからもまた發展する。商品生産は、つねに、貨幣商品の生産をも含み、その發展は、また、擴大する商品流通を媒介し、その價格を實現すべき貨幣商品金を供給するのである。商品流通は貨幣流通を制約し、自づからを實現する條件を創造しながら自己發展を遂ぐるものである。また、信用制度も、經濟の發展とともに生れ、その發展の根柢ともなつてゐるものである。すなはち銀行あるいは信用制度なるものは、貨幣の流通速度を促進し、また清算の方法によつて流通貨幣量の節約を實現するのみならず、流通の諸事情から發生するところの蓄藏貨幣をば流通貨幣へと、その機能の轉換をも媒介して、もつて追加貨幣需要に應じるものである。さらに銀行は、積極的に、信用貨幣を造出してもつて經濟的發展の要請する老大なる追加貨幣需要を充足する。

ところでこれら三つの供給源泉からの追加貨幣のうち第一と第二の追加貨幣は、シュムペーターの言葉をかりるならば、謂はゆる「過去の生産や現存せる商品についての證書」であり、「社會生産物にたいする既存の貢獻を代表するがごとき支拂手段」(註一)であつて、こゝには、一應、問題はおこらない。また第三の流通貨幣の節約により貨幣効率率の上昇から生ずる消極的な追加貨幣量についても問題はない。ただ信用貨幣の形成による追加貨幣の出現だけが問題なのである。

註一 Vgl. J. Schumpeter, *Entwicklung. SS. 146-7*. [邦譯「四七—一五〇頁參照」]。

追加貨幣としての信用貨幣は色々な過程を経て現はれる。信用貨幣の生成の詳細についてはすでに別の機會において述べた(本誌第十卷第二號所載の拙稿「信用貨幣論」參照)。それが如何なる方法をもつて現はれやうとも、金あるいは手許現金によつて保證されざる部分に關するかぎり、發行銀行そのものにとつては、まつたく、新たに形成されし追加資本である。併しながらこの私經濟的に、あるいは個別經濟的に、追加的な資本であつても、それが、直ちに、社會的にも「追加的」な資本であり、餘分の貨幣として純需要を意味するとは言ふことは出来ない。蓋しこれら追加的信用貨幣は、すでに經濟的發展の結果、追加され現存せる社會的生産物のうへに成立せる參加證だからである。この種信用貨幣は、なるほど「既存の貨幣額のかたはらに新たに創造されて現はれ來」(註二)たつたものではあつても、それに對應すべき社會生産物への貢獻がすでに存在するものであつて、この追加的社會生産物の價值實現のためにこそ、かの信用貨幣は新たに「創造」されたのである。それはシュムペーターの主張するがごとく、「將來の用役や、將來に生産せらるべき商品についての證書」でもなければ、「現在の商品によつても保證せられ得ない、従つてそれに對應しては社會生産物に對する

ならの貢献も存しないところの、たゞ特別にそのためにのみ「創造」せられしところの信用支拂手段では決してないものである（註三）。

註II Vgl. J. Schumpeter, a. a. O., S. 143. [邦譯二四三頁參照]。

註III Vgl. J. Schumpeter, a. a. O., SS. 140—7, 153. [邦譯二四七一—二五〇頁および二五七一—二五八頁參照]。

然れどもかゝる商品流通と貨幣流通との對應關係は必ずしも明瞭ではなく、殊に信用貨幣そのものゝ異質化は、この對應的なつ前者による後者の被制約の關係を、はなはだしく曖昧化し、漠然たるものたらしめる。こゝに種々の謂はゆる「創造論」たるものが根ざす根據が伏在してゐるのである。信用貨幣の異質化の解明において、われわれはすでにこの點に言及した。ついて見られよ（前掲「信用貨幣論」參照）。

五　　む　　す　　び

われわれは、以上において、經濟的發展の根本的條件は、生産手段の機能的配置の轉換といふ物質的な基礎のうちに求めらるべきものであつて、直接、流通面にはなきことを明らかにした。そこでは、精々、貨幣の機能の變化があるだけであつて、「追加」貨幣の要、不要のごとき貨幣の量的規定の問題は起らないのである。然るに、この貨幣機能の轉換が現實には信用貨幣の發生といふ具體的な過程を通じて實現されるものであり、これら信用貨幣の異質化は、貨幣流通と商品流通との對應の關係を不明瞭にし、前者の後者による被制約の關係をば曖昧のものとなす。そうして價格騰貴の現象の隨

伴は、論者をして、經濟的發展の前提條件として追加貨幣の「創造」の必要なることをすら結論せしむるにいたつたのである。

併しながら經濟的發展と商品の價格運動とが共に起り、相錯綜することがあつても、兩者は明らかに區別さるべき別個の事柄であつて、しかもかゝる商品の價格運動が謂はゆる「追加貨幣の創造」によつて惹起される一般物價水準の變化と同一視し、この價格變化を通じて經濟的發展の實現成就されることからして、經濟的發展の前提條件に貨幣的條件を加へることは、まつたく、誤りといはねばならない。このことは、貨幣の蓄積形態のいづれにあつても、蓄積が同時に貨幣の現實の支出を意味し、一方での貨幣蓄積が同時に他方における現實的蓄積を可能にすることからして容易に、明らかどころである。而して銀行は貨幣の機能轉換により、あるいは資本形態の轉換によつて、貨幣の蓄積と現實の蓄積とを同時に可能にするものであつて、信用貨幣は銀行のかゝる媒介の過程において現はれるものである。信用貨幣の生成が社會經濟上もつところのこのやうな意味を知るとき、銀行が果して論者のいふがごとき「追加」資本の「創造」能力を持ち得るものなりやいなやは、容易に理解し得るところである。そこには資本の形態轉換ないしは、新資本の形成はあつても、決して謂ふところの「創造」なるものはありません。

貨幣をもつて交換手段となし、この規定においてのみ貨幣を見る謂はざる交換手段學說的貨幣本質觀にありては、貨幣流通は商品流通の反映でもなければ、後者による前者の被制約の關係も認められない。貨幣の増加はあり得ても收縮は考へられず、貨幣流通と商品流通との對應の關係は、全く、なく、貨幣は商品の側とならざる關係もなくその數量は増加し

得べく、従つてその數量の増加は需要の増加であり、なにも過去の生産の所産でもなければまた現在の商品によつても保證されざるそれ自身のためにのみ創造されし參加證として現はれるのである。従つて銀行による信用貨幣の創造は、銀行自體にとつても「追加」貨幣であり、社會經濟的にもまた全く、餘分に「創造」されし「追加」貨幣として現はれるわけなのである。

かくしてひとびとは、發展的經濟における信用貨幣發生の意味を知るとともに、かゝる「創造論」の貨幣本質觀的背景をも、こゝに、見することが出来るであらう。